あ…
じゅわわっ♥
みんなの憧れのお嬢様はお漏らし上手!?
大決壊!
お嬢様の秘密
パチャ
パチャ

～目次～

♭１章目
お嬢様のおトイレ事情

♭２章目
女の子なのに……野ション！

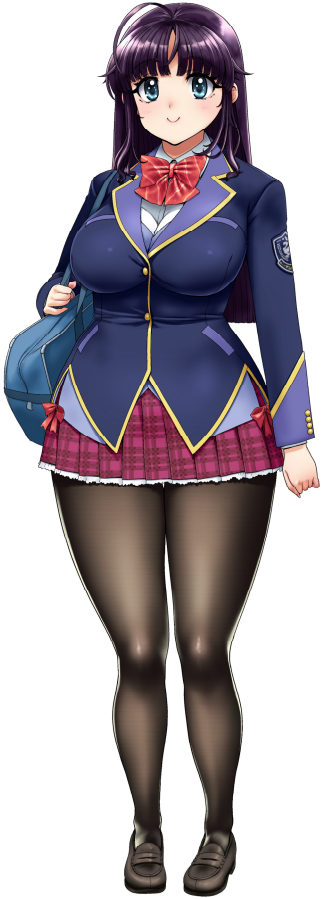
♭３章目
ブルマで立ちション！

♭４章目
おねしょ！

♭５章目
我慢できない……学校でオナニー

♭６章目
おむつを充ててドキドキ登校！

♭終章
お嬢様はおむつ娘



♭１章目　お嬢様のおトイレ事情

「おはようございます、夜桜さん」
「おはよう」
「おはようございます！　夜桜先輩っ」
「ごきげんよう。今日も元気ね」

　春うららかなつぼみ学園の朝。
　穏やかな青空に、いくつもの挨拶が行き交う。
　そんな挨拶のすべてに一つ一つ丁寧に応じているのは、
　夜桜恋歌（よざくれんか）
　という一人の少女だった。

　恋歌とすれ違い、振りかえらぬ者はいないだろう。
　それほどまでに恋歌の容姿は目を引いた。

　流れるような黒髪は常に雨に濡れたように輝き、お尻にまでかかっている。
　清楚なブレザーはたわわに実った乳房に押し上げられて、はち切れそうになっていた。

　スカートに包み込まれた大きなお尻はショーツが見えそうになるほどに詰められているけど、不思議なことにそれが下品にはみえない。
　極小のスカートの布切れからは、黒タイツに包まれたムッチリとした太ももが伸びていた。

恋歌のことを知らぬ生徒は、このつぼみ学園にはいないと言っても過言ではない。
実力テストでは常に上位に名前が載り、運動神経も抜群で部活動のヘルパーには幾度となく呼ばれ、さらにはピアノやバイオリン、その他の管弦楽器を演奏させればプロ級と、『完璧』という言葉は恋歌のためにある言葉だとも言える。
いつしか恋歌は、

――ムーンライトシンデレラ。

という二つ名で呼ばれるようになっていた。

「ごきごんよう、ごきげんよう……」

そんな恋歌は、ローファーを鳴らしながらゆったりと進み、周りの生徒から交わされる挨拶に丁寧に応えていく。
昇降口で上履きに履きかえて、教室へ。
その後ろにはファンクラブや非公式の親衛隊が付き従い、教室まで長い行列が続く。その様子はまるで大名行列のようでもあった。

☆

　しかしそんな恋歌にも悩みがあった。
　それも、絶対に誰にも言えない恥ずかしい悩み。

　じゅわっ、じゅわわっ。

　クロッチの裏側に広がる、生温かい感触。
　会陰を伝ってお尻のほうにまで広がっていく。
（うぅ、ちょっと……、漏らしちゃった……）

　背筋よく席について課題を解いている恋歌は、気まずそうに黒タイツに覆われた太ももを擦り合わせる。
　時は、四時限目の数学の授業中。
　生徒たちはプリントの問題を解き、分からないところがあったら教科書を開いて公式を調べる。
　静まりかえった教室に、シャーペンを走らせる音だけが刻まれていった。

（あっ、ううっ……も、漏れそう……）

じゅわっ、ジワワ……。

　もうすでに漏らしているけど、まだ決壊したわけじゃない。
　それになにより、チビッたことを恋歌自身が認めたくはなかった。

　恋歌の悩み――。
　それはいつも注目されているから、トイレに行きづらいということだった。
　女子からだけではなく、男子からの視線もあるのだ。
　その視線を感じるのは自意識過剰かもしれないけど、恥ずかしいものは恥ずかしい。
　だから恋歌はいつもトイレに行くタイミングを逃していた。

　トイレに行けるとしたら、授業が始まる瞬間――そして休み時間が終わる瞬間、廊下が凪いだように静かになる、その一瞬だ。

　そしていまも数少ないトイレのチャンスだった。

（数学の課題、全部解いた生徒から昼休み……！　ここはできるだけ早く問題を解いてトイレに行く……！）

　恋歌は心に決めると、意識から尿意を切り離して問題に集中する。
　そして目にも止まらぬ早さで問題を解き終えると、教師にプリントを提出する。

「それではお先に失礼します」

　優雅に教室を去ると、恋歌はまだ授業中の静まりかえった廊下に出る。
　その直後――。
　恋歌は女子トイレへとダッシュしていた。
　だけどあんまり速く走りすぎると膀胱に振動が伝わって漏らしてしまうから、できるだけ慎重に、しかし迅速に。

　じゅわっ、じゅもも……。

「あっ、ま、まだ、ダメ……っ」

　走りながらも、クロッチの裏側には生温かい感触が広がっていく。その温もり

は黒タイツにも伝わっていき、内股がジンワリと生温かくなっていった。

じゅもも……っ。

漏らしながらもダッシュして、なんとか女子トイレのドアを体当たりするようにして開く。

ツーン……、

とした女子トイレの香りが鼻孔に満たされる。
それは長年に渡って染みついてきた、何百人……何千人もの女子のおしっこや下り物が混じり合った香りだ。

「あ、あともう少し……！」

じょぼぼぼぼ！

バタン！　シュルルッ！　ドンッ！
漏らしながらも個室に駆け込んだ恋歌は、切羽詰まった音を三連続で響かせる。
それは即ち、トイレの個室のドアを閉める音と、ショーツと黒タイツをまとめ

て降ろす音、そして勢いよく洋式トイレに腰掛けた音だ。

プシャッ！
しゅいいいいいいいいいいい……。

「あっ！　あっ！　あっ！　あっ！」

我慢していたおしっこを放ち、恋歌は快楽のあまりに引き攣ったソプラノボイスをあげてしまう。
もしも個室の外に誰かがいたなら、個室でエッチなことをしているのではないかと誤解してしまうほどに色っぽい声。

「ン、、ああ……ああぁ……。
はぁぁ〜……」

しゅおおおおおおおおおお……。

なんの躊躇いもなく放たれたおしっこが、洋式の便器に弾けていく。
女の子の尿道は、太く短い。
そのぶんだけおしっこが一気に噴き出してきてしまうのだ。

「はぁぁ〜〜……」

しゅわわわわわわわわ……。
しょおおおおおおおお……。

　至福の吐息を漏らしながら、我慢していたおしっこを一気に放っていた恋歌は、

「んんっ」

　ぶるるっ、
　身体を大きく震わせると、おしっこの最後の一飛沫が、

プッシャア！

　勢いよく噴き出して便器に散って消えていった。
　あとに残ったのは――、

「はぁ……、はぁぁ……」

　恋歌の熱い吐息と、ツーンと個室に満ちるアンモニア臭だった。
　ずっと我慢していたおしっこを放つことができた恋歌は、頬が蕩けそうなほどに弛緩している。

　その口元からは、一筋のヨダレが流れ落ちてきていた。

「き、気持ちよかった……」

　一説によれば、女性が我慢していたおしっこを出すことは、射精している感覚に近いと言われている。
　いまの恋歌は、正にその感触を味わっていた。

「あっ、ああぁっ、ああぁ……っ」

　口元は快楽に緩み、恥丘もお尻までも桃色に染まっている。
　そんなクレヴァスからはみ出している肉ヒダから、

　ピチョン……、ピチョン……。

　垂れている雫は、おしっこなのか、それとも別の体液なのか……、それは恋歌自身にも分からないことだった。

「ああぁ……、そ、そうだ。おまた、拭かないと」

　快楽のあまり意識が飛びかけていたけど、ここで賢者モードになっているわけにはいかない。
　昼休みがが始まれば、生徒たちで廊下は溢れかえるだろう。そのときに恋歌がトイレから出てきたりなんかしたら、勘のいい生徒は授業を早く切り上げてトイレに駆け込んでいたことに気づくかもしれない。
　昼休みが始まる前にトイレから出ておかなければ。

「……ンッ」

　落とし紙を手に取って、恥丘を拭いていく。
　その瞬間に、股間から走る微弱電流。
　恋歌はその感覚をごまかすようにして、優しくクレヴァスを拭っていく。

　恋歌はこの年にもなって、まだ産毛さえも生えていないパイパンだった。

　ふっくらと膨らんだ恥丘に、シュッとクレヴァスが刻まれている。
　割れ目の奥の奥へと指を食い込ませていって、おしっこを拭き取っていき、綺

麗になったらショーツをあげようとするも――。

「やだ。こんなにおもらししてたなんて」

　クロッチの裏側は、恋歌のおしっこによって恥ずかしい色に染め上げられていた。
　鮮やかなレモン色に、ではない。
　朝からずっと我慢していたおしっこは、時間の経過とともに烏龍茶のような茶色へと変色していた。
　そこにトイレに駆け込んできたときに漏らしてしまったおしっこのレモン色が混じり合って、なんともいえないグラデーションを醸し出している。

「うう、お尻のほうまで染み、広がっちゃってる……」

　ショーツのお尻のほうにまでおしっこの染みが広がっていた。
　座ったままでおしっこを漏らすと、クレヴァスを伝ってお尻のほうにまで垂れてきてしまうのだ。
　お尻の染みは、座ったままでおもらし

した、なによりも恥ずかしい染みだった。

「穿きたくないけど……、うう……っ」

　恋歌は顔をしかめながらもおもらしショーツをあげていく。
　恋歌の穿いているショーツは、連日のようなおしっこ我慢によってクロッチの外側までも黄ばんでいる。
　そのことを悟られないために、恋歌はいつも黒タイツを穿いているのだった。

「……ンン〜!?　こ、これは……、スカートじゃなかったら染みになっちゃってたかも……うう〜っ」

　キュンッ、
　クロッチに縦筋が食い込むと、切なげに痙攣する。
　ムッとした生臭く、おしっこ臭い女の香りが漂う。
　だが恋歌はスカートの裾を整えると、何事もなかったかのようにトイレの個室をあとにするのだった。
　女の子がスカートを穿くのは、少しくらいショーツを汚しても平気だから……

なのかもしれない。
　もしもズボンを穿いていたら、大変なことになっていたことだろう。

☆

（はぁ……ライナー入れようかなぁ……。でも、おまた蒸れちゃうし……ごわごわするし……それに完璧にガードしてくれるわけじゃないし……）

　蒸れたショーツを我慢しながら、なんとか帰りのショートホームルームを迎える。
　いつもこの時間になるとお尻のほうまでジットリしている。
　それは決して馴れることのない感覚だ。

（あともうちょっとで帰れる……！）

　そう思っただけで、

　じゅももっ。

　生温かいものをチビってしまう。
　たけどショーツのなかは気持ち悪いけ

ど、なんとか担任の合図とともに放課後がはじまってくれる。
　帰りのショートホームルームが終わると、男子たちは近所の商業施設のフードコートに wi-fi を求めて駆り出し、女子たちは教室でおしゃべりに興じる。

　恋歌は帰宅部なので、あとはもう帰るだけだ。
　その代わり、家に帰ればピアノのレッスンや家庭教師が待っているのだけど。
　今日も帰ったらバイオリンのレッスンだ。
　恋歌は帰りの挨拶をかわし、昇降口で靴を履きかえて校門を出て学校をあとにする。

（下り階段……、嫌いだけど……！）

　だけど昇降口に辿り着くためには階段を降りなければならない。
　学校にはエスカレーターなんて便利なものはないのだ。

（うっ！　うっ！　うっ！）

　じゅわっ、じゅわわっ！

　階段をゆっくり降りているつもりであっても、そのたびに膀胱に振動が伝わっていく。
　最後におしっこを放ったのは昼休みだ。
　もう恋歌の膀胱は危険水域にまで達していた。

（まだ、まだダメ……！）

　ぷしゅっ、じゅもももっ！

　階段を降りているうちにも、ごまかしようのない量をおもらししてしまう。
　だけどまだ誰にもバレていない。
　黒タイツが暗く湿っているけど、まだセーフだ。

（早く……、早く帰らないと……！）

　少しずつちびりながらも、なんとか昇降口に辿り着き、外履きに履きかえる。
　校門を出た恋歌は、周りの生徒たちに気取られないように、できるだけ早く歩いて帰路を急いでいく。
　だけど校門を出たときに、無意識のうちに気が抜けてしまったとでもいうのだろうか？

　じゅももっ。

　生温かい液体が尿道を駆け抜けていき、じんわりとクロッチの裏側が生温かくなる。
　クロッチから滲み出してきたおしっこは黒タイツに覆われた太ももの内側をイタズラっぽくくすぐっていくと……、やがてタイツに染みこんで無くなってくれる。

「ま、まだ……セーフ……っ」

　いや、もうタイツから滲み出してきている時点ですでにアウトなのではないかというツッコミが入りそうだけど、それ

は絶対に認めたくはないことだった。
　認めてしまったが最後、心が折れてしまうに違いない。

「まだ、まだギリギリセーフ……ッ」

　恋歌はゆっくりと歩を重ねていく。
　あんまり早く歩いたら膀胱に振動が伝わってしまうから、急ぎながらも慎重に。
　女の子の尿道は、膀胱から真下にスッと通っている。
　しかも尿道の長さは小指の長さほどもないのだ。
　思いっきり走ったり、くしゃみをしただけでも漏らしてしまうこともある。
　そんな恋歌の貧弱な尿道が、パンパンに膨らんだ膀胱に屈しようとしていた。

「まだ……、まだおトイレじゃないから……ううっ」

　帰路を急ぎ、周囲の光景は閑静な住宅街になっている。
　恋歌の家は、この住宅街の奥まった場所にある。
　学校との距離は、歩いて三十分ほど。

　おしっこを我慢し続けるには、あまりにも長い道程だった。
　だけど恋歌はいつもこの通学路をおしっこを我慢しながら歩いてきたのだ。
　今日だってきっとトイレという名のゴールを――。

　じゅわわっ。

「あっ、あうう!?」

　意思とは無関係に漏れ出してくる生温かい感触に、恋歌は思わずお尻をキュッと後ろに引いてしまう。
　黒タイツを穿いているとはいえ、腰を覆っているスカートからショーツが見えそうになる。

　じゅわわっ、じゅわわわ……。

「あっ！　あっ！　あっ！　ま、まだ……っ」

　幸いなことに、閑静な住宅街を碁盤目のように通っている路地にはひとけはない。

　だけどいまはそれが恋歌の緊張感を緩めているとでもいうのだろうか？

「イヤ……ッ、おしっこが、勝手に……！」

　じゅもももも……。
　……キュッ！

　いままさに決壊しようとしたその瞬間、恋歌は気合で尿道を閉じてみせる。
　だけど決壊寸前の尿道をそうそう簡単に閉じることができるはずもなくて、
　キュン！　キュン！

「うっ、くぅ〜〜〜っ」

　おまたが勝手に痙攣して、それでもなんとか尿道を閉じると、
　キュウゥゥ……ッ。
　切なげな痛みがおまたから発せられて、このまま弛緩しそうになる。
　だけどここは我慢だ。

「はぁ……、はぁ……、はぁ……。あ、危ないところだった……。だけど止めちゃえばこっちのものなんだから……っ」

　額に脂汗を浮かべながら、再び歩き始めようとする。
　これから差し掛かるのは、我慢の大敵の下り階段。だけど、ここさえ乗り越えたら――

「え……っ」

　恋歌はそのときに気づいてしまった。
　太ももをくすぐるように這い、伝い落ちている、幾筋もの生温かい感触に。
　この感触は、もしや――。

「う、うそ……」

怖いけど視線を落として自らの股間……内股を見やる。
だが直後には恋歌は目を疑ってしまった。
なにせそこにあったのは、恋歌のおしっこによって黒よりもなお暗い黒に染め上げられた黒タイツだったのだ。

学校の階段を降りているときにはまだ分からない程度だったけど、いまやごまかしようのないほどに漏らしてしまっている。

（あっ、あっ、ああぁ……勝手に漏れてきちゃ……！　ア、アウ……ッ、セウトッ！）

どう見てもアウトだけど、ここでアウトと認めるわけにはじゅももっ、じゅもももももっ。

「ううっ、くぅぅ〜〜〜っ」

こうなってしまうと、どんなにおまたに力を入れてもおしっこを止めることはできない。

　女の子の尿道括約筋は弱いのだ。
　それに尿道も太くて短い。
　だから一度でも心が折れてしまえば、そこですべてを撒き散らしてしまうことになる。
　――まさに、いまの恋歌のように。

「だ、ダメ……！」

　ぎゅっ！
　もうなりふり構ってはいられない。
　恋歌は周りに誰もいないことを確認すると、スカートの上から両手で股間を抑えはじめたではないか。

　――前抑え。

　それは尿意に屈しようとしている女の子が見せる、あまりにも屈辱的なポーズだった。

「はぁ……っ、はぁ……っ、ううっ！」

　だがそれは破滅への前奏曲（プレリュード）でもある。
　股間を両手で押さえたまま、どうやってショーツと黒タイツを下ろせばいいのだろうか？

　そもそも、家まで歩いて二十分以上かかるというのに、ずっと前抑えしているのは無理ではないか？
　もしもこんなポーズを誰かに見られたらどうする？

　パニックになりかかっているというのに、なぜか冷静になって状況を把握してしまう。それも絶望的な。

　じゅわわっ、
　じゅももっ。
　じゅもももっ。

「あぁ……。だめぇ……」

　いつ誰がこの路地を通りかかるか分からない。
　ずっと前抑えしているわけにもいかず、少しずつ両手の力を抜いていき……、

「ゆっくり……、ゆっくりおまたから手を離していって……」

　だが、決壊のそれが合図だった。

じゅもも、じゅわわっ。
ぷしゅっ、
しゅいいいいいいいいいいい……。

「えっ!?　あっ、ちょっっっ！」

しゅわわわわわわわわ……っ。

　クロッチに、そしてお尻のほうにまで、取り返しのつかない生温かい感触が広がっていく。
　へっぴり腰になっているお尻を生温かい手が撫で回していき、黒タイツに覆われた太ももが、背徳的な温もりに包まれていく。

「あぁぁ……、ぱんつのなかが、あったかぁい……」

　トイレ以外の場所でおしっこをはじめてしまった。
　それなのに、尿意を放ったことは『快楽』だと、脳が認識してしまっている。

こうなってしまっては、もはや少女のふっくらとしたおまたでおしっこを止めることなど、できるはずもなかった。

じゅわっ、じゅわわわ……。
しょおおおおおおおおおおお……。

股間を前抑えしている指の隙間から、黄金水が溢れ出してくる。
スカートはもうおしっこでビタビタだ。
黄金水は地面に散ると、暗い水たまりとなって広がっていく。

「あっ、あっ、ひっ、ぁぁぁぁぁ……」

しょわわわわわわわわわ……。
シュイイイイイイイイイイ……。

恋歌の頬は、すでに快楽に弛緩していた。
背徳的な温もりと、尿意から解放された快感。
そしてもしも誰か見られてしまったらどうしようかというスリルがごちゃ混ぜになって、少女の身体を溶かしていく。

「はぁ……、はぁ……、はにゃぁぁ……」

ジョボボボボボボボボボ……。

　ショーツから響き渡るくぐもった水音が、更に勢いを増していく。
　それは恋歌の心が折れ、放尿の快楽に心を奪われてしまった瞬間だったのかもしれない。
　快楽に緩んだ少女の太い尿道から、一気に恥水が溢れ出してくる。

ジョワワッ、
　ジョワワワワワワワ！

「はぁ……っ」

　黒タイツを幾筋ものおしっこが流れ落ち、ふっくらとした太ももを、膝を、その裏も、そしてふくらはぎを生温かいおしっこに撫で回されていく。
　気持ち悪いはずなのに――。
　恋歌には、下半身を流れ落ちていくおしっこが、得も言われぬ愛撫のようにも感じられていた。
　そしてついに、恋歌は決して言っては

ならない言葉を口にしてしまう。

「……気持ち、いいよぉ……」

　えっ？
　呟いてしまってから、ハッとなる。
　いま、自分はなんと呟いた？

　……気持ち、いい……？

　おしっこを漏らして、気持ちいいだなんて。
　そんなの絶対におかしいのに。赤ちゃんでもないのに。
　しかしどんなに認めたくなくても、排泄欲というのは人間の深いところに根ざした原始的な快楽でもある。
　思春期の少女とはいえ、その本能から目を逸らすことなどできるはずがなかった。

「あ、あぁぁぁぁぁ……、おしっこ、終わった……。全部出て、終わって、る……？」

　気がつけば、おもらしは終わっていた。

　恐る恐る、股間を前抑えしている両手を離すと……、もうおしっこは出てこない。……一滴も。

　あとに残ったのは――。

「ぱんつ、冷たくなってる……」

　おしっこに生温かく染まったショーツは、春風に嬲られて早くも冷たくなっていた。
　冷たくなっているのはショーツだけではない。

　濡れそぼった黒タイツもすっかり冷えて、太ももやふくらはぎにペッタリと貼りついてきていた。

「ううっ、靴の中までびしょ濡れだなんて……」

　なんてはしたないことをしてしまったのだろう。
　誰もいないとはいえ、尿意に屈して、おもらしをしてしまうだなんて。
　恋歌の足元には、たった一つだけの大きな水たまりが広がり、ツーンとしたア

ンモニア臭を漂わせていた。
　春風に、恥臭が流れていく。

「早く、帰らないと……っ」

　もしも誰かがここを通りかかったら、恋歌が恥ずかしい水たまりを作り出した張本人だと気づかれてしまうことだろう。

　ジュポ、ジュポ、ジュプ……。

　おしっこが溜まったローファーから、一歩進むたびに気持ち悪く淫靡な音が鳴り響く。
　それでも濡れたスカートを、おしっこにだんだら模様に暗く染まった黒タイツを見られるわけにはいかない。

「お願い、どうか誰も気づきませんように……っ」

　濡れそぼったショーツが気持ち悪いけど、いつものようにしっかり背筋を正して。
　濡れた靴が気持ち悪いけど、おしとやかに、できるだけ平然と歩いて。

　そのおかげか、帰路で何人とすれ違ったけど、恋歌がおもらしをしたことに気づいた者はいないようだった。

　……ただし。
　翌日になると、学校では誰かが通学路で盛大におもらしをしたらしいという噂で持ちきりとなるのだった。

ここまで読んでくれて、
ありがとうございました！

体験版はここまでです。

次のページからは、
既刊の CG を掲載しておきましたので、
合わせて楽しんでもらえたら嬉しいです。

～既刊案内～

DLsite など

各種

DL サイトで

配信中